



在職20年、美肌に貢献しています!

アルナシリ イダマルゴダさん
(スリランカ出身) 一丸ファルコス(株) 常務執行役員



母国スリランカの大学在学中に奨学金を得て、インドの大学に留学し獣医学を学びました。帰国後、さらに研究を深めたいとの思いから、1993年に当時日本の獣医畜産の分野で有名だった岐阜大学に留学しました。

日本に来てすぐに知り合った一丸ファルコス(株)(本社:岐阜県、化粧品と健康食品原料の製造会社)の現社長と8年にわたり交友を深めた後、同社に入社しました。きっかけは、これまでやってきたことが肌や健康を扱う今後の研究に活かせると感じたこと、「これから立ち上げる研究所の原動力となる基礎研究をあなたに任せたい」という社長から寄せられた熱意、そして私のチャレンジ精神でした。

入社後、私が特に注力したのは、当時、あまり知られていなかったスリランカやインドの伝統医学で、5000年の歴史があるアーユルヴェーダを、日本のヘルス&ビューティー業界に広めることでした。そして抗炎症効果があり美肌原料になる「ニームリーフエキス」の抽出に成功するという大きな成果を収めました。ニームの木は古くから奇跡の木とよばれ、アーユルヴェーダでは「万能薬」、「村の薬局」と称されています。

2006年に大阪で開催された大手化粧品メーカーの技術者が集まる大規模な研究発表会で、「ニームリーフエキス」を発表しました。ここで多大な評価をいただき、一躍日本の化粧品業界における会社の知名度が上がったことが、

私にとっての最大の転機でした。また研究開発の部門にとどまらず、国内営業への協力や大学時代の人脈を通じて海外企業との共同研究を開拓したことなどが評価され、開発部、国際部の部長を経て、2018年に執行役員、2019年に常務執行役員に昇進しました。

ニームの産地へは会社の援助を得て、植樹協力や利益の還元、教育インフラの整備を通して恩返しをしています。

日本で生まれた3人の子供も、長男が東京の大学院、次男がインドの大学、長女は中学3年生と、それぞれ自分の道を歩んでいます。

私はといえば、日本は大好きですが、いまだに生の魚は苦手です。夢は、これからの世界市場を見極めて海外進出を果たし、お世話になった会社の発展に貢献していくことです。



▲会社の研究室にて



このコーナーではNICライブラリーの本やイベントなどを紹介します。
NICライブラリー 名古屋国際センタービル3階 9:00~19:00 月曜休館

故郷とのつながり

料理を口に運んだ時、懐かしく感じたり、過去のある場面や風景を思い出したりする経験はありませんか。

食べ物はただお腹を満たすだけでなく、その味は心の奥深くに眠っていた大切な誰かの思い出をやさしく呼び起こすもの…今回紹介する「故郷の味は海をこえて」は、難民の人たちがふるまってくる料理を通して、彼らが直面する現実や「難民」について理解を深めることができます。

皆さんは日本に暮らす難民についてどのくらい知っていますか。難民と言ってもその境遇はさまざまです。着の身着のまま故郷を後にせざるをえなかった人、家族や愛する人たちと離れ離れになってしまった人、そして安住の地を求めたの度重なる引越…。

そんな彼らにとって、故郷の味だけが唯一残された故郷とのつながりであり、心のより所という人も少なくありません。著者はそんな大切な味を共有させてもらうことで、ぼつりぼつりと出てくる彼らの言葉から、ここ日本にたどり

着くまでに乗り越えてきた幾多の困難に寄り添います。

なぜ彼らがかげがえのない故郷を離れなければならなかったのか、知り合いもいない異国の地でどのように毎日を過ごしているのかなど、他者を思いやり、その境遇に思いを馳せることができる力を養うことも、多文化共生や国際協力につながるのではないかと感じる1冊です。



「故郷の味は海をこえて」(安田菜津紀著・ポプラ社)



Q 2019年末時点での難民の数は?

NICレポート

第35回 外国人芸術作品展が開催されました! Foreign Artist Exhibition ~35th Anniversary~



昨年11月3日(火)から8日(日)まで、名古屋国際センター4階展示室で開催された「外国人芸術作品展(FAE)」。

1986年に始まり、今回で35回目を迎えました。

1986年に「セントラル・ジャパン・インターナショナル・ソサエティ(CJIS)」を中心としたボランティアと、7か国12名のアーティストによって始まった当作品展。今回は新型コロナウイルスの影響により、会場では検温と消毒を行い、ソーシャルディスタンスを保ちながらの開催となり、6日間で合計438人の参加者が訪れました。

作品展は、35回目の記念であると同時にある大きな変化を迎えました。作品展の創立から東海地域の多文化共生をアートを通じて伝えることに奮闘してきた、ジェームズ・F・ゴーターさんとジャン・ガビンスさんが今回限りで運営から勇退され、新たな節目を迎えたのです。

「初めの頃、私たちはアーティストを探し、場所を確保し、企画・運営をすすめることに全力を注ぎました。全てはこの作品展がうまくいくことを願ったことでした。しかし、年を経ていくにつれ、作品展の規模はその数と質と共に大き

くなっていき、いつしか私たちの手から作品展そのものが年間行事として自立するようになっていきました。そのような組織に関われたことは、名誉であり大きな喜びでした」とジェームズさんは語ります。

今後も引き続き当作品展を先導するCJIS代表の滝リンドさんは、「創立当初から一緒に作品展を創り上げてきた2人が離れるのは、とても寂しいけれど、色々なことがあったこの年にもイベントを無事開催でき、2人の勇退に花を添えることができ嬉しい」と感謝の気持ちを述べました。

参加者からは、「新型コロナウイルスの影響で他の様々なイベントの中止・延期が続く中、例年とは異なる形ではあったが、とぎれることなく開催することができてよかった」「作品点数は例年より少ないが、じっくり鑑賞できる良い機会になった」などの感想が寄せられました。

次なるステージへ向かうFAEの今後に向けてジェームズさんは、「私が経験したのと同じ気持ちを今後の運営陣も感じてくれることを願っています。これからは作品展を成長させつ、新たなことにも前向きに挑戦してほしい」とメッセージを残しました。



▲右)滝リンドさん
中)ジェームズ・F・ゴーターさん
左)公財)名古屋国際センター 岩田 理事長



▲ジェームズ・F・ゴーターさんと自身の作品

